神戸市外国語大学 学術情報リポジトリ

Lexical meanings of "verbs of motion" in medieval Russian chronicles : especially on ITI and KHODITI

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2013-03-01 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 岡本, 崇男, Okamoto, Takao メールアドレス: 所属:
URL	https://kobe-cufs.repo.nii.ac.jp/records/1543

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



中世ロシア年代記における「移動動詞」の語彙的意味
—ити と ходити を中心に—

岡本　崇男

1．はじめに

ロシア語の「移動動詞」（глаголы перемещения）、すなわち現代ロシア語文法においてしばしば「運動の動詞」（глаголы движения）という名称が与えられている動詞の多くは、中世ロシア年代記のテキストにも使用例を見ることができる。しかし、“*иде* Игорь на Деревляны. и побѣди а (=я). и возложи на нь дань болши Олговы”（『ラヴレンチー年代記』、914年）「イーゴリはドレヴリャネを攻撃して、彼らを打ち負かし、彼らに対してオレグのよりも多くの税を課した」、“они же рѣша яко *ходихом* въ Болгары. смотрихомъ како ся покланяють въ храмѣ рекше в ропати”（Lavr. 987年）「彼らは言った。『わたしたちはボルガリの国に行って、礼拝堂、つまりモスクで礼拝するところを見てきました』」のиде（ити のアオリスト 3 人称単数形）や ходихом（ходити のアオリスト 1 人称複数形）を現代語のように「歩いて行った」と解釈してよいのだろうかという疑問が生じる。すなわち、キエフ公イーゴリが本当に徒歩でドレヴリャネ族を征伐に行ったのか、あるいはキエフ大公ヴラヂミルの使者達が、キエフから直線距離でも1000キロメートル以上離れたところにあるヴォルガ・ブルガール人たちの国に歩いて行ってきたのだろうかという疑問が生じるのである。もしかすると、動詞そのものは昔から使われていたのだが、中世の ити と ходити は、これらの動詞の現代の後継者 идти、ходить と違った語彙的意味を持っていたのかもしれないと仮定することも許されるのではないかと思われる。

そこで、本論文では、中世ロシア語と現代ロシア語の移動動詞との間にどの程度の意味の違いがあるのかを検証してみたい。なお、言語資料は年代記テキストに限定する。年代記テキストの資料として使用するのは、『ラヴレンチー年代記』、『イパーチー年代記』、『ノヴゴロド第一年代記・新輯』、『モスクワ年代記集成（15世紀末）』である。なお、『ノヴゴロド第一年代記』については、必要に応じて『古輯』のテキストも利用する。

2．移動動詞の文法的意味と語彙的意味

現代ロシア語の文法書で「移動動詞」とされているのは、идти – ходить, ехать – ездить, бежать – бегать, лететь – летать, плыть – плавать, лезть –

лазить, ползти – ползать, брести – бродить, нести – носить, вести – водить, везти – возить, гнать – гонять, тащить – таскать, катить – катать の14組[1]の動詞である。いずれのペアも定方向動詞と不定方向動詞から成り立っており、それぞれの動詞は移動の方法にかんして意味を共有している。例えば、идти – ходить は「足で（あるいは自力で）移動する」、ехать – ездить は「乗り物で移動する」という共通の意味を持っている。しかし、それと同時に定方向動詞は「一つの方向において一気（中断なしに）に行われる動作」（действие, совершаемое в одном направлении и за один прием (без перерыва)）を表すのに対し、不定方向動詞は「様々な方向に及ぶ動作、あるいは一つの方向において規則的に繰り返される動作」（действие, совершаемое в разных направлениях, либо регулярно повто-ряющееся в одном направлении）を表すとされている［KRG, §270］。この意味的な対立は、現代ロシア語文法では移動動詞という小規模ながらも独立した範疇に固有のものであると見なされている。つまり、この範疇に特有の文法的な意味対立なのである。さらに、移動動詞には、歩いて移動するか（идти – ходить, нести – носить）、乗り物を利用して移動するか（ехать – ездить, везти – возить）という移動方法の区別もある。

以上のことから、移動動詞の意味の歴史的変化を検討する際には、現代語に存在するとされる文法的意味対立の有無と移動手段の区別の有無を検証していくことになる。

3．語彙数の変化と意味の変化との関係

移動動詞の範疇に属する語彙の数は、現代ロシア語と中世ロシア語では違っている。

現代ロシア語の移動動詞と外見上ほぼ同一の動詞のうち ити – ходити, яхати / ѣхати – яздити / ѣздити, бѣжати / бѣщи / бѣчи – бѣгати, плути – плавати, лѣзти – лазити, пълзти / ползти – пълзати / ползати, брести – бродити, нести – носити, вести – водити, везти – возити, гънати – гонити の11組と летѣти が、現在完結している唯一の中世ロシア語辞典である［Sreznevskij］に集録されている。また、現在刊行中の Словарь русского языка XI–XVII вв. では летать, катити – катати, тащити – таскати も見出し語となっている。ちなみに、これら 5 つの動詞の項目の記述を見ると、летати については12世紀の使用例があるが、катити については16世紀の文献からの引用が掲載されており、その他の動詞について

1　移動動詞の数は研究者によって違っている。ここでは、ロシアのいわゆる「アカデミー文法」の流れを汲む［KRG 1989, §271］に従った。

は17世紀後半の文献から例文が採られている。従って、中世ロシア語においても移動動詞が使われており、17世紀頃には語彙の数が現代語と同じになったと考えてよさそうである。

しかし、書き言葉としての中世ロシア語の出発点である古教会スラヴ語においては､「移動動詞」の語彙数が中世ロシア語よりもかなり少なくなってしまう。現在入手できる古教会スラヴ語の辞典のうち、いわゆる「正典」の語彙のみを集めた［SSS］には、возити, яздити, летати, лѣзти – лазити, пълзти – пълзати, брести – бродити, тащити – таскати, катити – катати が収められておらず、вести（=везти）, плуть, плавать, яхати も出現頻度が極めて低い。

従って、中世ロシア語は、古教会スラヴ語の規範を継承しながらも、移動動詞についてはその数を増やしていったということになる。その原因は、おそらく、東スラヴ語の内部で独自の発達が進行したからではないかと思われる。そして、話し言葉の影響が書き言葉に少しずつ姿を見せるようになり、中世ロシア語の末期になると、書き言葉の規範の制約が緩和されて、катити – катати, тащити – таскати も文献に登場するようになったと説明することができる。

4．中世ロシア語の移動動詞の意味

4. 1. ити と ѣхати

中世ロシア年代記において動詞 ити は、最も出現頻度の高い動詞の一つである。例えば、現存する年代記の中で成立年代が最も古いものの一つである『ノヴゴロド第一年代記・古揖』では、быти（525例）、приити（198例）に次いで三番目に多い頻度で出現する（120例）。この文献における、他の移動動詞の出現数は、ходити の38を除いてあまり高くなく、ѣхати が 3 例、ѣздити が 3 例、вести が17例、везти が 5 例といった状況である。特に，注目に値するのは、ѣхати の使用例が ити のそれに比べて圧倒的に少ないという事実である。『ノヴゴロド第一年代記・新揖』における ити と ѣхати の分布状況を比較してみると（図 5 と図 6 を参照）、ити は『古揖』との重複部分の方が非重複部分よりも出現頻度が高いのに対して、ѣхати は重複部分にはほとんど現れない。別の見方をすると、古い時代の記事に ѣхати が使われないと言ってもよい。『ノヴゴロド第一年代記』の場合、古揖には1016年から1352年までの出来事[2]が記録されており、新揖には854年から1447年までの出来事が記録されているのだが、古揖と新揖の記述が重複していない1016年までの記事の中にも ѣхати の使用例は見られない。

2　切れ目なく記録されているのは1333年までである。

ѣхати の分布状況が年代記の成立した時代よりも記述の対象となる時代と関連しているらしいことは、『ラヴレンチー年代記』と『イパーチー年代記』で ити と ѣхати の出現頻度を比較することによってさらに明らかになる。これら二つの年代記に共通しているいわゆる『原初年代記』(あるいは『過ぎし年月の物語』) にも ѣхати の変化形がほとんど現れない。『原初年代記』に記録されているのは、ルーシの建国にまつわる伝説と、852年から1110年までの記事であるので、やはり古い時代の記述に ѣхати は馴染まないようである。

ただし、記述される時代が下るに従って ѣхати の使用頻度が高まるというわけではない。『ラヴレンチー年代記』、『イパーチー年代記』、『ノヴゴロド第一年代記・新揖』のいずれにおいても、ある時期を頂点として、徐々に出現頻度が低下しているのである（図 2 、図 4 、図 6 参照)。そして、この傾向は、ити の頻度低下と歩調を合わせている（図 1 、図 3 、図 5 参照)。また、上記の 3 つの年代記よりも後の時代に成立した『モスクワ年代記集成（15世紀末)』では、1386年の記事を最後に ѣхати の変化形が姿を消してしまう。

ѣхати の使用頻度の低さは、古教会スラヴ語の伝統である可能性が高い。例えば,［SSS］おいて яхати の頻度は 8 とされている。この辞書が語彙収録の対象とした古教会スラヴ語の17の「正典」文書には、2 つの四福音書 (『ゾクラフォス写本』と『マリア写本』) と 2 つのアプラコス、すなわち祝日用福音書抄録 (『サヴァの本』と『アッセマーニ写本』) が含まれているので、相当数の語彙が重複していることになる。つまりある語彙が福音書の中で 1 回使われただけで［SSS］で示される頻度は 4 になる可能性がある。従って、8 例というのは極めて低い数値である。これに対して ити の出現頻度は1000を超えている[3]。少なくとも上記の 4 つの文書だけで1009ある[4]。見方を変えれば、古教会スラヴ語テキストに比べて、年代記テキストでは ѣхати が多用されているということもできるのであるが[5]、いずれにしてもその使用には大きな制限があり、時代が

3　［SSS］では ити の頻度が “＞100” となっているが、これは明らかに誤植である。［SSS, p.46］によれば、“＞100” は「100以上200未満」を意味している。しかし、『マリア写本』一つに限っても ити の活用形、分詞、不定詞の総数は300を超えている。

4　出現頻度の算出は、ヘルシンキ大学がインターネット上に公開している古教会スラヴ語文献の電子テキストを資料とし（http://www.helsinki.fi/slaavilaiset/ccmh/)、コンピュータ上に稼働するプログラミング・ツール grep に活用形の正規表現を引き数としてわたすことによって行った。

5　ити と ѣхати の出現頻度は、『ラヴレンチー年代記』で773と50（15.5:1)、『イパーチー年代記』で862と210（4.1:1)、『ノヴゴロド第一年代記・新揖』で313と13（24.1:1)、『モスクワ年代記集成（15世紀末)』で773と22（35.1:1）である。一方、『原初年代記』の部分に限ると、『ラヴレンチー年代記』では286と 7 （40.9:1)、『イパーチー年代記』では245と 4 （61.25:1）なので、ити の相対的な頻度が高くなる。ところが、『ノヴゴロド第一年代記・古揖』では155と 7 （22.1:1）

下っても状況に大きな変化は見られない。

このように ити と ѣхати の出現数に大きな差があるということは、ити が「足で歩いて移動する」という行為のみを表すのではなく、一般的な移動を表すための汎用の移動動詞であったことを意味している。実際に、年代記テキストに見られる ити は、馬を利用した移動を表していることが最も多く。時には、船を利用した移動も表している。

［例 1］и бы*с*(ть) сѣча силна. яко посвѣтяше молонья. блещшеться оружье. и бѣ гроза велика. и сѣча силна и страшна. видѣв же Ярославъ яко побѣжаемъ есть. побѣже съ Якуномъ княземъ Варяжьскы(м). и Якунъ ту о*т*бѣже луды златоѣ. Ярославъ же приде Новугороду. а Якунъ иде за море.

そして激しい斬り合いがあり、稲妻が光るように武器がきらめくのであった。そして大きな雷と、激しく恐ろしい斬り合いが繰り広げられた。ヤロスラフは形勢が悪くなったのを見て、ヴァリャーギの公ヤクンとともに逃げ、ヤクンはそこで金の帷子を失った。そして、ヤロスラフはノヴゴロドに到着し、ヤクンは海の向こうに行った。（『ラヴレンチー年代記』1024年）

なお、『ラヴレンチー年代記』に収められている『原初年代記』の最後の部分に『イパーチー年代記』と一致しない ѣхати の使用例がある（図 2 と図 4 を比較せよ）。それらは具体的に、ѣдучи（ 2 例）、ѣхати（ 1 例）、ѣхахом（ 1 例）なのだが、これらはすべて『イパーチー年代記』に含まれていない「モノマフの教訓」の中で使用されている。つまり、ити の変化形とは比べ物にならないほど出現頻度が低いとはいえ、ѣхати の変化形はモノローグ形式のテキストに現れやすいのかもしれない。ちなみに、二つの年代記の『原初年代記』に共通して見られる ѣхати の変化形は、945年の記事の ѣдемъ（ 2 例）[6] と1103年の記事の ѣхавъ（ 1 例）で、すべて直接話法の中にある。また、少なくとも本論文で検討の対象とされた年代記テキストには、ѣхати の教会スラヴ語形 яхати の使用例が一つもない。これは同じ母音（< **ē*）で始まる動詞 ясти「食べる」とは正反対の現象である。すなわち、年代記テキストでは教会スラヴ語形 ясти が使われるのが普通であって、東スラヴ語形 ѣсти は『モスクワ年代記集成（15世紀末）』のような後期の年代記にさえ 1 例しか見られない。おそらく、ѣхати の使用には文体的な要因も関係しているのであろう。

なので、古措の方が ити の相対的頻度がやや低い。

6　『ラヴレンチー年代記』では єдемъ と綴られている。

4. 2. ити と поити

ити には、現代語の定方向動詞と同じ意味（「一つの方向において一気（中断なしに）に行われる動作」）を認めることができるが、それは現在時制、現在分詞、そして未完了過去の場合が多い。

［例 2 ］слышавше же деревляне яко опять идеть. сдумавше со княземъ своим. Маломъ.〔現在時制〕

ドレヴリャネは（イーゴリが）再び向かっていることを聞き知って、自分たちの公マルと協議して...（『ラヴレンチー年代記』945年）

［例 3 ］яко приде ми вѣсть яко идут к тобѣ Берендичи. и Печенѣзи. и Торци〔現在時制〕

「あなたの方にベレンヂチ、ペチェネーギ、トルコ人たちが向かっている」という知らせが私に届いたときに...（『ラヴレンチー年代記』1097年）

［例 4 ］Володимеру бо разболѣвшюся. в се же время бяше у него Борисъ. Печенѣгом идущемъ на Русь. посла противу имъ Бориса. сам бо боляше велми.〔現在分詞〕

ヴラヂーミルが病気になったとき、ちょうどそのとき彼のもとにはボリスがいた。ペチェネーギがルーシを攻めるために兵を進めていると、彼らに対して彼（ヴラヂーミル）はボリスを送った。自分が重い病を患っていたからである。（『ラヴレンチー年代記』1015年）

［例 5 ］Придоша прузи [мѣсяца августа] въ 28. И покрыша землю. и бѣ видѣти страшно. идяху к полунощнымъ странамъ. ядуща траву и проса.〔未完了過去〕

［ 8 月］28日にイナゴがやって来た。そしてそれらは地面を覆い、見るも恐ろしい光景であった。それらは草と黍を食べながら北の国々に進んで行くのであった。（『ラヴレンチー年代記』1096年）

一方、出現頻度が最も高いアオリスト形は、多くの場合、定方向動詞的な意味ではなく、「出発する」という意味で使われている。このことは、ити のアオリスト形が年代記テキストの現代ロシア語訳で шел, шли でなく、пошел, пошли が当てられることが多いことによって裏付けられる。以下に、始動の意味のアオリスト形の例を挙げ、それぞれの例に［PVL 1996］の現代ロシア語訳を添える。

［例 6 ］Ярославъ и Мьстиславъ. собраста вои многъ. идоста на Ляхы.

ヤロスラフとムスチスラフは、多くの兵を集めて、リャヒを攻めるために出発した。（『ラヴレンチー年代記』1031年）[*Ярослав и Мстислав, собрав воинов многих, пошли на поляков*]

［例 7 ］ и раздѣлишася надвое. князь бо Глѣбъ и дружина его идоша и сташа у еп(и)с(ко)па. а людье вси идоша за волхва. и быс(ть) мятежь великъ межи ими.

すると（人々は）二つに分かれた。グレブ公と彼の従士団は主教のもとへ行ってそこに立ち、（その他の）人々はすべて呪術師のもとへ行った。そして、両者の間に大きなもめ事が起きた。（『ラヴレンチー年代記』1071年）[*И разделились люди надвое: князь Глеб и дружина его пошли и стали около епископа, а люди все пошли к волхву. И началась смута великая между ними.*]

［例 8 ］ Олег же выиде и-Стародуба и приде Смолиньску. и не прияша его Смоляне. и иде к Рязаню.

オレグはスタロドゥブを出て、スモレンスクにやって来たのだが、スモレンスクの人々は彼を受け入れなかった。そこで、彼はリャザンに向かった。（『ラヴレンチー年代記』1096年）[*Олег же вышел из Стародуба и пришел в Смоленск, и не приняли его смоленцы, и пошел к Рязани.*]

ただし、［例 9 ］のように定方向動詞の意味を持つアオリスト形も存在している。

［例 9 ］ слышавъше же то князи русстии, поидоша за Днѣпрь и поидоша вси въкупѣ, по них же идоша 9 днии, и заидоша за Калакъ рѣку, и послаша въ сторожихъ Яруна с Половьци, а сами станомь сташа ту.

ルーシの公たちはそれを聞くと、ドニェプル川を渡り、全軍一体となって進み、彼らを 9 日間追ってカラク川を越えた。そして彼らはヤルンをポロフツィとともに先遣隊として派遣し、自分たちはそこで陣を敷いた。（『ノヴゴロド第一年代記・古揖』1224年）

さて、年代記テキストにおいて、ити のアオリスト形が現代語の “пойти” の意味で使われているのであれば、中世ロシア語の поити のアオリスト形は、どのような意味を表しているのだろうか。『ラヴレンチー年代記』の校訂テキストと［PVL 1996］の現代語訳を見比べると、поити のアオリスト形もやはり пошел, пошли と訳されている。果たしてこれら二つの動詞は、この過去時制においては、同義語なのであろうか。

文献によって違いがあるものの、ити と поити はどちらも出現頻度の高い語彙である。例えば、ити と поити の使用例は、『ラヴレンチー年代記』で535対297（『原初年代記』の部分は286対140）、『イパーチー年代記』で862対781（『原初年代記』の部分は245体149）、『ノヴゴロド第一年代記・新輯』で313対232（『古輯』との重複部分は122対101）、そして『モスクワ年代記集成（15世紀末）』で

773対945である。これらの数値をもとにすると、поити は年代記において伝統的に頻繁に使用される語彙であり、15世紀ぐらいまでは ити が数の上で優勢であるが、16世紀には優劣の逆転が起きたという推定が成り立つ。しかし、いずれにしても長期にわたってどちらの語彙もよく使われており、一つの年代記の中に共存していることも事実として認めなければならない。また、ある写本では ити のアオリスト形が使われているが、異本では поити のアオリスト形が使われているというような例があまり多く見られない。例えば、“и поимше тали своя. и онѣхъ пустивше. въсташа о*т* града въ своя си идоша”（『ラヴレンチー年代記』997年）が異本（ラヂヴィル写本、アカデミー写本）では поидоша になっているのだが、むしろこれは例外に属している。年代記の写字生たちが二つの動詞をほとんど混同することがなかったということは、これら二つの語彙の意味の違いが理解できたからだとも考えられる。

接頭辞のついた定方向動詞は、現代語においては、接頭辞によって動作様態（Aktionsart）が表わされているだけでなく、-ыва- 等の接尾辞を伴っていなければ、その動詞は完了アスペクトに属することになっている。しかし、поити には、実例こそ少ないものの［例10］、［例11］、［例12］のような未完了過去形が存在している。これらのうち［例10］、［例12］の未完了過去形は、明らかに繰り返される動作を表している[7]。

［例10］а кормника 2 бѣста. единъ на кормѣ. а другыи на носѣ. и аможе хотяхуть тамо поидяхуть. не обращающа лодьями.
また、舵取りが二人いて、一人は船尾に、もう一人は船首におり、船の方向を変えることなく、望む方向に進めたのであった。（『ラヴレンチー年代記』、1151年）[8]

［例11］Того же лѣта отъяше князь Рюрикъ посадничьство у Жирослава и выгнаша его изъ Новагорода, и онъ поидяше къ Суздалю къ князю Андрѣю, и даша тогда посадничьство Иванкови Захарьиницю.

7　［例11］の поидяше の意味についてはよくわからない。『新輯』の異本では、この箇所に『古輯』と同じアオリスト形 иде が使われているからである。この文の最初の述語 “отъяше” も未完了過去形（3 人称単数）なのだが、これも異本ではアオリスト形 отъя となっている。“того же лѣта”（「同じ年に」）で始まる文の述語は、事実を伝えるアオリスト形であるのが普通なので、この例における未完了過去形の使用は、書き手個人の癖なのかもしれない。

8　『イパーチー年代記』にも、これとほぼ同じ記述が見られる：... а кормьника два бѣста. един на носѣ а дроугыи на кормѣ. аможе хотяхоуть тамо поидяхоуть не обращающе лодии（1151年）。そして、この未完了過去形は『モスクワ年代記集成（15世紀末）』でもそのまま継承されている：а коръмника два бяста, един на кормѣ, а другои на носѣ, и ямо же хотяху, тамо поидяху, а лодеи не обращаху.（1151年）

同じ年にリューリク公はジロスラフから市長官職を取り上げ、（人々は）彼（ジロスラフ）をノヴゴロドから追放した。そして彼（ジロスラフ）は、スーズダリのアンドレイ公のもとに向かったのであった。そこで（人々は）市長官職をザハリヤの息子イヴァンコに与えた。（『ノヴゴロド第一年代記・新輯』、1171年）

［例12］Бѣ бо обычаи его таковъ: когда ни поидяше на воину, то не вѣдяше мысли его никто же, камо идет.

なぜなら彼（リトアニア大公アルギルダス）の習慣がそうだったからである。つまり、彼が戦争に赴く時には、彼がどこに向かう考えであるのか誰も知らなかったのである。（『モスクワ年代記集成（15世紀末）』、1365年）

ити のアオリスト形に現代ロシア語訳で пойти の過去形（пошел, пошли）が充てられるのは、［Růžická 1957, 16］の指摘によれば、それが文の前後関係によって決定されるからだという。上記の例文でこのことを検証すると、［例 6 ］の述語は собраста – идоста、［例 7 ］は раздѣлишася – идоша – сташа – идоша – бысть、［例 8 ］は выиде – приде – не прияша – иде であって、全てアオリスト形で一回の動作を意味している。つまり、一つの動作が終わって、次の動作が行われるのであるから、本来は「（ある目的地を目指して）行った」ということしか意味していない иде / идоша が、その前後にある動作との関連において、相対的に「（ある目的地を目指して）出発した」と解釈されるのである。また、ити は поити と違って「出発する」という語彙的意味を持っていないのだから、ити のアオリスト形が文脈を考慮することで「（ある目的地に）到着した」と解釈されても特に問題はないと思われる。

なお、ѣхати のアオリスト形が現代ロシア語で поехал（поехали）と訳せるかどうかはわからない。既に述べたように、この動詞は、『原初年代記』における出現頻度が極めて低く（ 1 例のみ）、［PVL 1996］の現代語訳と照合する意味がないからである[9]。また、『イパーチー年代記』と『ノヴゴロド第一年代記・新輯』のように、接頭辞の付いた поѣхати が ѣхати よりもよく使われている文献と、『ラヴレンチー年代記』や『モスクワ年代記集成（15世紀末）』のようにどちらの出現頻度も低調な文献があるので、全般的な傾向について何かを言うことができない（図 4 、図 6 と図 2 、図 8 とを比較せよ）。

9　ѣхати のアオリスト形が使われている箇所は次のとおりである：“а сам идо*х* на о(т)ця своего мѣсто Переясл*а*влю. и внидохо*м* на с(вя)т(о)го Бориса д(е)нь ис Чернигова. и ѣхахом сквозѣ полкы Половьчскиѣ”（1096年）「一方、わたし自身は自分の父の公座につくためにペレヤスラヴリに向かった。そして、我々は聖ボリスの祭日にチェルニゴフを出て、ポーロフツィの軍勢の中を通り抜けていった」。そして、［PVL 1996］ではアオリスト 1 人称複数形 ѣхахом が ехали となっている（“а сам пошел на стол отца своего в Переяславль. И вышли мы на святого Бориса день из Черникова и ехали сквозь полки половецкие”）。

4. 3. ходити と ѣздити

不定方向動詞 ходити と ѣздити についても、出現頻度については、定方向動詞 ити と ѣхати の場合と状況が似通っていて、どの年代記においても ходити の方が ѣздити よりも頻繁に現れる[10]。また、『ラヴレンチー年代記』と『イパーチー年代記』に収められている『原初年代記』および『ノヴゴロド第一年代記・古輯』のような古い書記伝統を反映したテキストには、ѣздити がほとんど現れない。ただし、『モスクワ年代記集成（15世紀末）』では、全般的にこの動詞の使用例が少なく1405年の記事（第327葉裏）を最後に 1 例も見られなくなる。ちなみに、ほぼ同じ年代の記事から ѣхати も姿を消す。

ходити と ѣздити の意味の違いについては、次の様に言うことができる。すなわち、ѣздити は明らかに「馬に乗る」という意味を持っているのだが、ходити には「自分の足で歩く」という意味だけでなく、［例13］のように遠征の報告にも使われる。

> ［例13］в том же лѣ*т*(ѣ). Ярополкъ ходи на Половьчскую землю. к рѣцѣ зовомѣи Донъ. и ту взя полонъ многъ. и 3 городы взяша Половечскыѣ...
>
> 同じ年。ヤロポルクは、ドンと呼ばれる川の方にあるポロフツィの国を攻めに行ってきた。そしてそこで多くの捕虜を捕まえ、ポロフツィの町を 3 つ占領した。（『ラヴレンチー年代記』1116年）

なお、上の例の様に、不定方向動詞がアオリスト時制の場合、反復の意味を持つことはなく、「行って・赴いて到着した事実がある」という意味を表していると思われる。一方、アオリスト以外の形式では、「行ったり来たりする」という意味も表すようである（［例14］、［例15］）。

> ［例14］се кн(я)зь Юрьи прибѣгъ одинъ. нача ѣздити около града г(лаго)ля твердите городъ.
>
> すると見よ。ユーリィ公が一人で駆け寄り、馬に乗って城壁の周りを回り出し「城壁を堅固にせよ」と言うのであった。（『ラヴレンチー年代記』、1216年）
>
> ［例15］и почаша ѣздити оканьнии по улицамъ, пишюще домы христьянскыя.
>
> 呪われた者（タタール人）たちは、町中を回ってキリスト教徒の屋敷を記録するのであった。（『ノヴゴロド第一年代記・新輯』、1259年）

10　ходити と ѣздити の出現数は『ラヴレンチー年代記』で97対14、『イパーチー年代記』で130対45、『ノヴゴロド第一年代記・古輯』で51対 3 、『ノヴゴロド第一年代記・新輯』で104対25、『モスクワ年代記集成（15世紀末）』で141対22である。

すでに述べた様に古い書記伝統を反映したテキストには ѣздити がほとんど現れない。しかし、記述の対象となる時代が相対的に新しくなり、この動詞がいくらか使用されている箇所においては、ѣздити のアオリスト形が「和平を締結するための交渉に赴いた」という意味で使われることが多い（[例16]、[例17]、[例18]）。この場合、動作主は公、高位の聖職者（大主教、府主教）、「使者たち」（послы）である。

［例16］И ѣзди владыка Алексѣи и доконча миръ на всеи старинѣ.
アレクセイ師が赴き、従前の権利をすべて守ることを条件に和を結んだ。（『ノヴゴロド第一年代記・新輯』、1386年）

［例17］Тои веснѣ ѣздиша от Новагорода в Литву послы. (...) и взяша со княземъ Витовтомъ миръ по старинѣ.
その年の春にノヴゴロドからリトヴァに使者が赴いた。そして、従前の権利を守ることを条件にヴィタウタス公と和を結んだ。（『ノヴゴロド第一年代記・新輯』、1414年）

［例18］Того же лѣта ѣздиша на Москву к великому князю Василью Дмитреевичю послы Новгородские (...) с челобитьемъ от Новагорода и со многыми дары. И князь великы пожаловал их, миръ взя...
同じ年、モスクワにいる大公ヴァシーリー・ドミートリエヴィチのもとへノヴゴロドの使者たちがノヴゴロドからの嘆願書と沢山の贈り物を携えて赴いた。そして、大公は彼らを歓迎し、和を結んで...（『モスクワ年代記集成（15世紀末）』、1398年）

古い伝統を反映するテキストでは、上記の意味でも ходити が使われていたが（[例19]）、やがて ходити は「軍事遠征に赴いた」の意味で使用されるようになる（[例20]、[例21]）。ただし、ルーシの公や府主教がルーシの宗主であるキプチャク汗のもとに赴くことを意味する “ходи в Орду” 「オルダ（幕営）に赴いた」は軍事目的の遠征ではなく（[例22]）[11]、政治儀礼あるいは交渉のための移動であるが、この表現において ѣздити のアオリスト形が使われた例は、本論文で検討の対象とした年代記テキストには見られなかった。

［例19］въ то же лѣто ходи архепископъ Нифортъ Суждалю, мира дѣля, къ Гюргеви; и приятъ и съ любъвью Гюрги.

11　『ラヴレンチー年代記』（『スーズダリ年代記』）では、ходити ではなく、ити が使われている。ただし、アオリスト形ではなく、現在分詞の例が 1 つ見られるに過ぎない：... бяшеть Иоа*н* кня*з* с(ы)нъ Дмитриевъ ида в Ворду приказалъ Михаил кн(я)зю. блюсти о(т)чины своее и Переяславля「ドミートリーの息子イヨアン（イヴァン）公がオルダに赴く時、自分の世襲領地とペレヤスラヴリを守るようミハイル公に命じていたのであった」（1297年）。

同じ年、大主教ニフォントは、和を結ぶためにスーズダリのユーリィのもとへ赴いた。そしてユーリィは彼を友好的に迎え入れた。(『ノヴゴロド第一年代記・古輯』、1147年)

［例20］Тое же зимы Ярослав с(ы)нъ Всеволожь. Ходи из Новагород*а* за море. на Емь. гдѣ же ни единъ о*т* кня*з* Рускы*х* не взможе бывати. и всю землю из плѣни. и възвратися Новугороду.

同じ年の冬、フセヴォロドの息子ヤロスラフは、ノヴゴロドから海の向こうのエミ族（の国）を攻めに行った。そこにはルーシの公が一人も行ったことがなかった。そして、国全体を占領し、ノヴゴロドに帰ってきた。(『ラヴレンチー年代記』、1226年)

［例21］Того же лѣта князи Суздальские Дмитреевичи ходиша к Новугороду к Нижнему на дядю своего на князя Бориса Костянтиновича.

同じ年、ドミートリーの息子たちであるスーズダリの公たちはニジニ・ノヴゴロドにいる自分たちの叔父、コスチャンチンの息子ボリス公を攻めに行った。(『モスクワ年代記集成（15世紀末）』、1387年)

［例22］Князь великии Иванъ Даниловичь ходи во Орду, а с ним сынове его Семенъ и Иван, Андрѣя посла в Новгород.

ダニールの息子イヴァン大公は、オルダに赴いた。彼の息子たち（のうち）、セメンとイヴァンは彼とともに（オルダに行ったが）、アンドレイはノヴゴロドに遣った。(『モスクワ年代記集成（15世紀末）』、1339年)

ходити と ѣздити の 2 人称の命令法は、常に否定の助詞 не を伴っている。つまり肯定文であれば、иди, идѣте (идите) あるいは ѣди, ѣдѣте (ѣдите) と表現されるのだが、「行くな」・「行かないで下さい」と言う場合には、не ходи / ходите, не ѣзди / ѣздите でなければならない（[例23]、[例24]）。また、定方向動詞の命令法が否定の助詞を伴う例（не иди, не идите, не ѣди, не ѣдите）は見られない。

［例23］Новгородци же идоша Ростову по Мьстислава Володимерича. [и] поемше ведоша и Новугороду. а Давыдови рекоша не ходи к нам. [и] пошедъ Д(а)в(ы)дъ воротися Смолиньску. и сѣде Смолиньскѣ. а Мьстиславъ Новѣгородѣ сѣде.

ノヴゴロドの人々はヴラヂーミルの息子ムスチスラフを招くためにロストフに行き、彼（ムスチスラフ）を迎え入れて、ノヴゴロドに連れて来た。一方、ダヴィドに（ノヴゴロドの人々は)、「わたしたちのところに来ないで下さい」と言った。そこで、ダヴィドはスモレンスクに帰り、スモレンスクの公座に即き、ムスチスラフはノヴゴロドの公座に即いた。(『ラヴレンチー年代記』、1095年)

［例24］Изяслав же Дав(ы)д(о)вичь доиде Игорева броду и ту постиже и вѣсть и-Щернигова. о*т* своих ему приятель. рекуче ему не ѣзди кн(я)же никаможе.

ダヴィドの息子イジャスラフが「イーゴリの浅瀬」に到着した。するとその時、彼を支持する人々の知らせもチェルニゴフから届いた。それは、「公よ、どこにも行かないで下さい」ということであった。(『イパーチー年代記』、1160年)

ходити は ѣздити と違い、移動手段を問題としないので、［例25］のような隠喩的表現にも使用される[12]。

［例25］нь тольми бяше лют пожаръ, яко по водѣ огнь хожаше, горя, и хожаше чресъ Волхово, всѣмъ людемъ зрящим, и людии нѣколико истопи на Волховѣ.

しかし、極めて凄まじい火事であったので、火が川面を嘗めて、炎をあげながらヴォルホフ川を渡ったのであった。その時、全ての人々が見物していたので、何人かの人々がヴォルホフ川で溺れ死んだ。(『ノヴゴロド第一年代記・新輯』、1231年)

5．まとめ

本論文では、移動動詞のうち ити – ходити, ѣхати – ѣздити が中世ロシア年代記テキストにおいてどのような意味で使用されているのかを検討した。これによって得られた結果は、以下のようにまとめることができる。

先ず、定方向動詞と不定方向動詞の文法的意味対立、すなわち「一つの方向において一気（中断なしに）に行われる動作」と「様々な方向に及ぶ動作、あるいは一つの方向において規則的に繰り返される動作」という意味的対立は、確かにその存在が認められる。ただし、これには時制と法による制限がある。アオリスト時制においては、「移動した」という事実を伝えることが最も重要であり、目的地が明示されていれば、定方向動詞であろうが不定方向動詞であろうが、「一つの方向における」移動と到達が表されている。つまり、文法的意味対立は中和されると考えてよい。また、命令法 2 人称は、動作を肯定する場合に定方向動詞、否定する場合に不定方向動詞が使われるという棲み分けが観察される。これも意味対立が中和された結果である。

次に、移動方法の区別については、ѣхати – ѣздити がもっぱら「乗り物（主に馬）を使って移動する」ことを意味するのに対して、ити – ходити は移動手段

12　「炎が川面を嘗める」（“по водѣ огнь хожаше”）という表現は『ノブゴロド第一年代記・新輯』にあと 4 例見られる。

を問題としない、汎用性の高い移動動詞だと言うことができる。

参考文献

[KRG 1989] − *В.Н. Белоусов, И.И. Ковтунова, И.Н. Кручинина и др.,* Краткая русская грамматика. Москва. 1989.

[Janda 2008] − Laura A. Janda, “Motion Verbs and the Development of Aspect in Russian.” *Scando-Slavica.* 2008. pp. 179‑197.

[PVL 1996] − Повесть временных лет (по лаврентьевской летописи). Подготовка текста, перевод, статьи и комментарии Д.С. Лихачева. Под редакцией В.П. Адриановой-Перетц. Издание 2-е, исправленное и дополненное. Санкт-Пет ербург. 1996.

[Růžická 1957] − Rudolf Růžická, Der Verbalaspekt in der altrussischen Nestrochronik. Berlin. 1957.

[Sreznevskij] − *И.И. Срезневский,* Словарь древнерусского языка. Рипринтное издание. Москва. 1989.

[SSS] − *Р.М. Цейтлин, Р. Вечерка, Э. Благова,* Старославянский словарь (по рукописям X–XI веков). Москва. 1994.

年代記テキスト

1．Новгородская первая летопись старшего и младшего изводов. Москва – Ленинград. 1950. (Reprint: *Slavistic Printings and Reprintings.* **216**. The Hague ‑ Paris. 1969)

2．Полное собрание русских летописей. Том I. Лаврентьевкая летопись. Москва. 1996.

3．Полное собрание русских летописей. Том II. Ипатьевкая летопись. Москва. 1998.

4．Полное собрание русских летописей. Том XXV. Московский летописный свод конца XV века. Москва. 2004.

コンコーダンス、語彙集

中條直樹・酒井純 編,『ノヴゴロド第一年代記』（シノド版）コンコーダンス。（平成 7 － 9 年度・文部省科学研究費補助金による研究成果、課題番号 07301080）．名古屋．1998

中條直樹・酒井純 編,『ロシア原初年代記』コンコーダンスⅠ，Ⅱ。（平成 7 － 9 年度・文部省科学研究費補助金による研究成果、課題番号 07301080）．

名古屋．1998.
中條直樹・酒井純 編,『ノヴゴロド第一年代記』（新輯本）コンコーダンスⅠ,Ⅱ。（平成10－12年度・文部省科学研究費補助金による研究成果、課題番号10410108）．名古屋．2000.
中條直樹・酒井純 編,『スーズダリ年代記』（ラヴレンチー年代記）コンコーダンス。（平成10－12年度・文部省科学研究費補助金による研究成果、課題番号 10410108）．名古屋．2001.
中條直樹・酒井純 編,『モスクワ年代記集成（XV 世紀末）』コンコーダンスⅠ－Ⅲ。（平成14－-16年度・文部科学省科学研究費補助金による研究成果、課題番号 14310219）．名古屋．2004.
中條直樹・酒井純 編,『イパーチー年代記』コンコーダンス。（平成17－19年度・文部科学省科学研究費による研究成果、課題番号 17320048）．2006.

資料

図 1

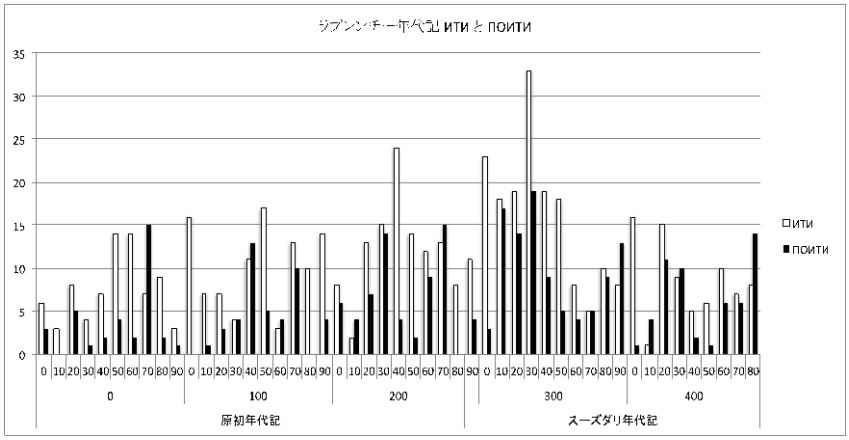


図 2

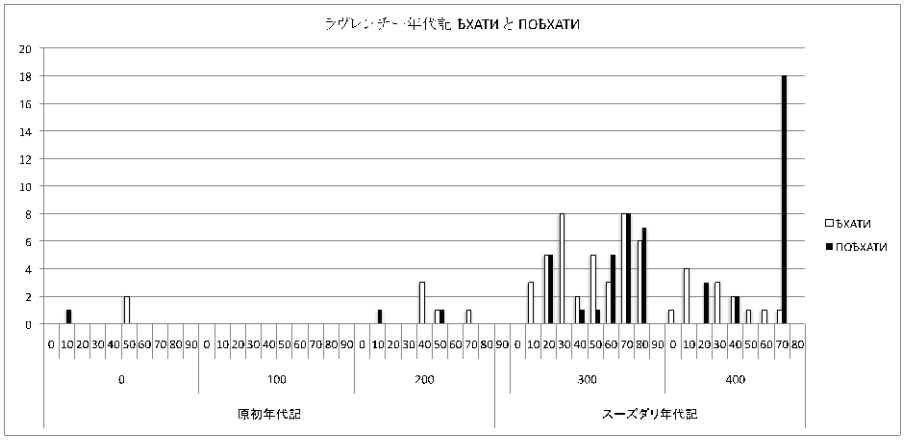


図 3

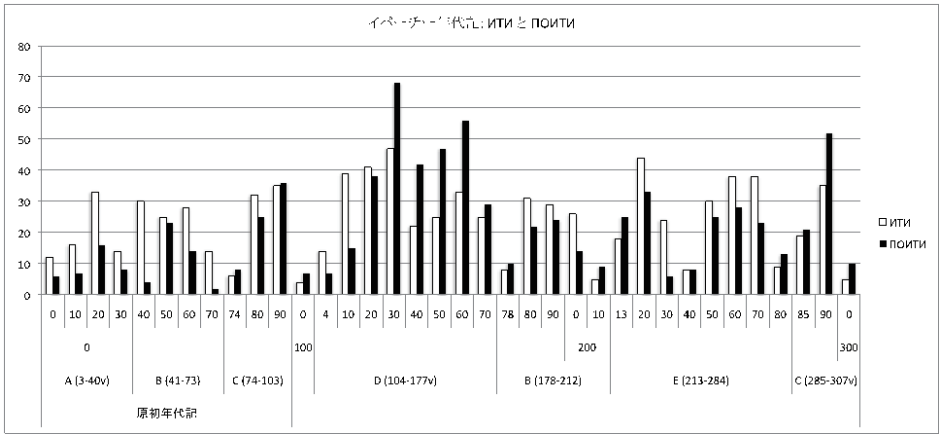

イパーチー一年代記: ИТИ と ПОИТИ
ИТИ
ПОИТИ
A (3-40v)
B (41-73)
C (74-103)
D (104-177v)
B (178-212)
E (213-284)
C (285-307v)
原初年代記

図 4

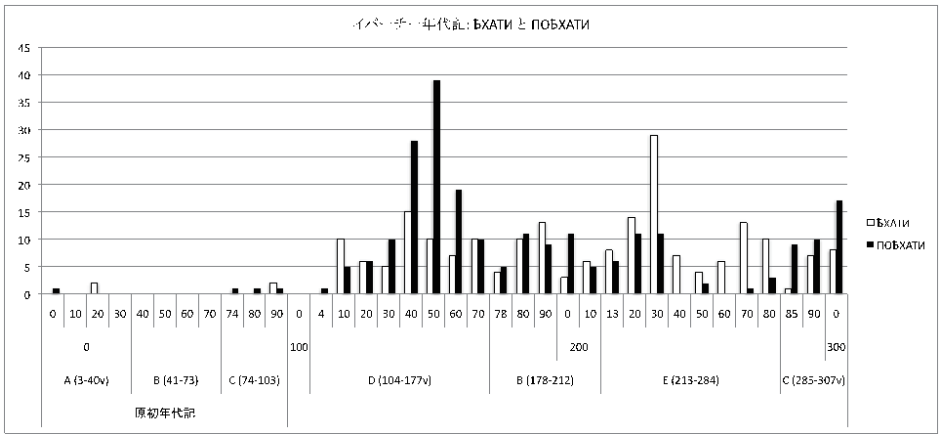

イパーチー一年代記: БХАТИ と ПОБХАТИ
БХАТИ
ПОБХАТИ
A (3-40v)
B (41-73)
C (74-103)
D (104-177v)
B (178-212)
E (213-284)
C (285-307v)
原初年代記

図 5

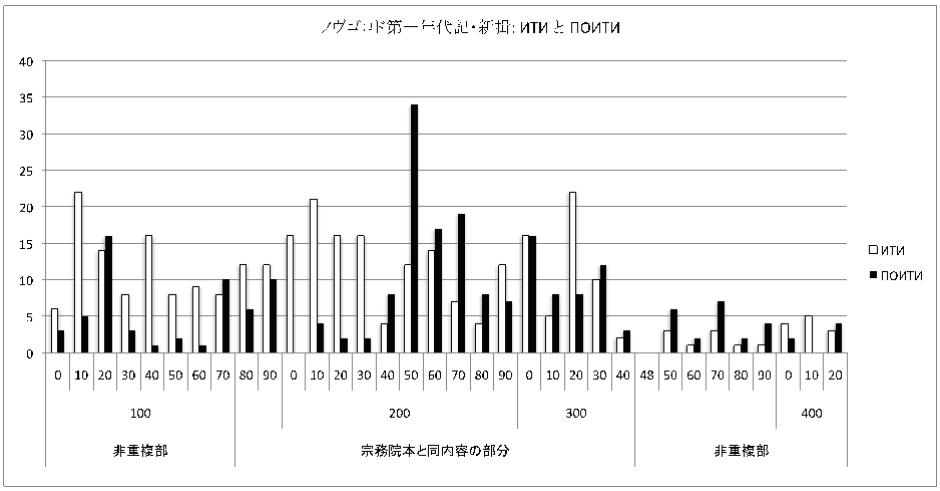

ノヴゴロド第一年代記・新抄: ИТИ と ПОИТИ
ИТИ
ПОИТИ
非重複部
宗務院本と同内容の部分
非重複部

図 6

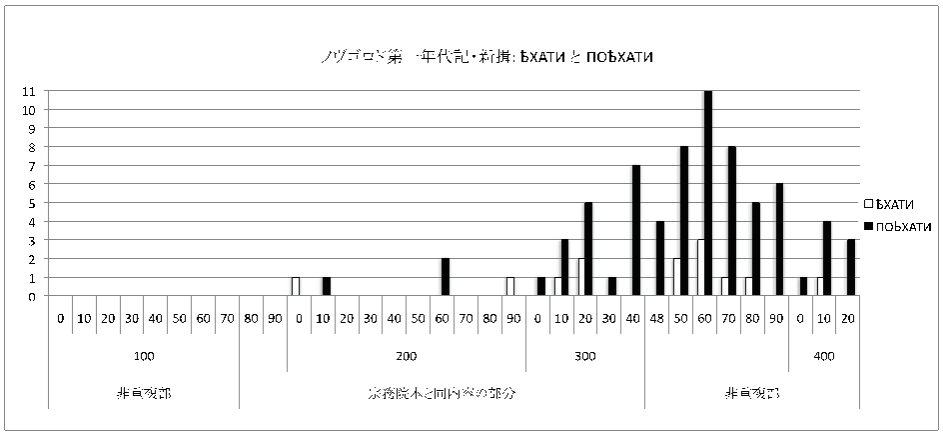

ノヴゴロド第一年代記・新撰: ЬХАТИ と ПОЬХАТИ
ЬХАТИ
ПОЬХАТИ
100
200
300
400
非自叙部
京務院本と同内容の部分
非自叙部

図 7

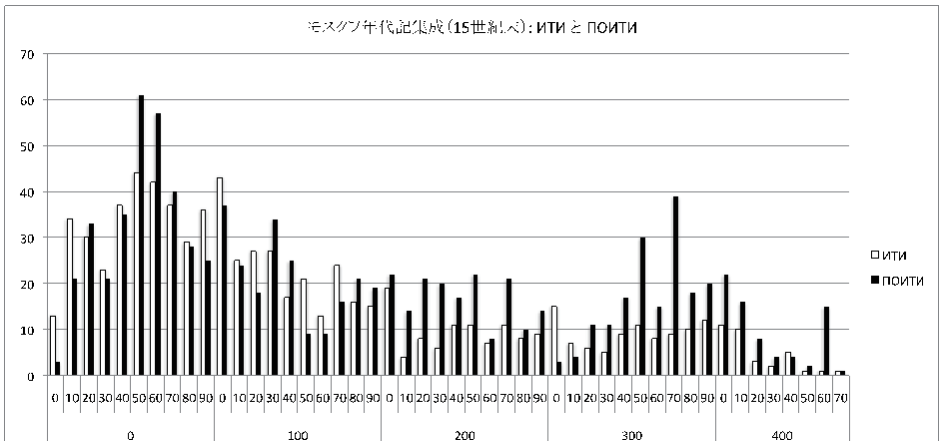
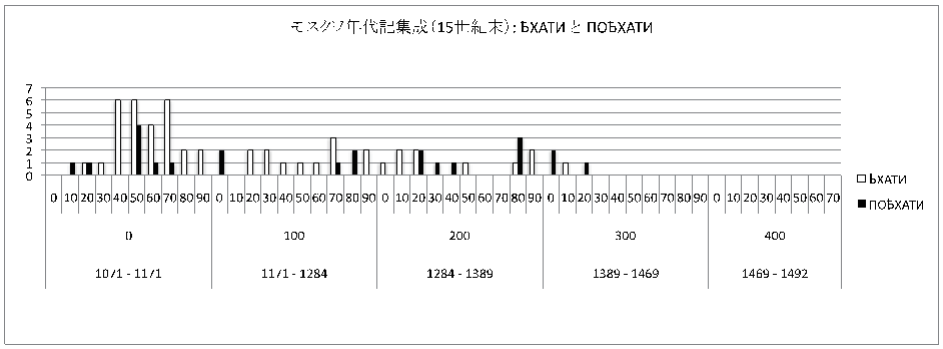

モスクワ年代記集成(15世紀しべ): ИТИ と ПОИТИ
ИТИ
ПОИТИ
0
100
200
300
400

図 8


モスクワ年代記集成(15世紀末): ЬХАТИ と ПОЬХАТИ
ЬХАТИ
ПОЬХАТИ
0
100
200
300
400
10/1 - 11/1
11/1 - 1284
1284 - 1389
1389 - 1469
1469 - 1492